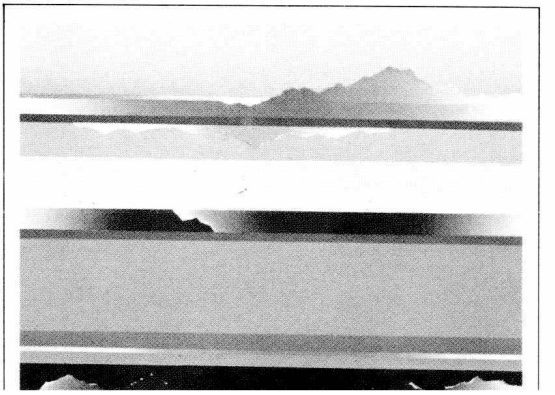
海図

田久保英夫



講談社

海図

一九八五年六月三〇日　第一刷発行

著者——田久保英夫
© Takubo Hideo 1985, Printed in Japan
発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—二　郵便番号二一二　電話東京〇三—九四五—二一一（大代表）

印刷所——豊国印刷株式会社　製本所——藤沢製本株式会社

定価——一五〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-06-200722-3（0）　（文1）

目次

Ⅰ 海図 5
Ⅱ 風の木 33
Ⅲ 野生 61
Ⅳ 凪 89
Ⅴ 夕の諧調 123
Ⅵ 草の路 149
Ⅶ 水宴 183

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

海

図

装　幀・山岸義明
装　画・広沢哲郎

I

海

図

じっと黙っている気配がする。
ひらいた扉のむこう、食卓の椅子の背に手をかけて、動かずにいるか、流し台のまえで、水に濡らしたままの掌を、まるで他人の掌のように眺めているか、そんな宗子の姿勢まで眼に浮かぶ。
こうした沈黙の短い時間は、むこうとこっちの空気の間に、薄く光る髪剃りの刃のようなものが降りてくる気がする。
どんなに身近な肉親でも、他人でもそうだ。こんな時は、ふだんお互がどれほど遠くにいてわかり合えないか、知らずにいるのだ、と思えてくる。
居間の縁側に、観音竹と洋蘭の鉢が置いてある。蘭の方は宗子が買ったので、ゴールデン・ビオサムという黄色の五弁に、臙脂の花舌のある花をつけ、ガラス戸ごしに日光を浴びている。今いのちが開いたという感じの花もあり、今いのちが消えるという花もある。そういう春の陽のなかの植物の営みに、こちらの意識まで吸い込まれそうになる。
生れてくる花の髄に、もし微小な感覚器があったら、何を感じるだろう。そして死んでいく

花の髄に、微小な感覚器があったら……。

いや、これは宗子の父親の令吉の言い廻しだ。

不意に扉のむこうで、俎に包丁を使う音がする。しかし、とんとんと勢いよく切る音でなく、ゆっくりと何かを押し切りにする音だ。レモンを輪切りにしているのだろう。父親の令吉のところへ行く時、よくそれを用意する。ほかにジンの罎と、タッパー・ウエアに入れた漬け物などだ。

「ほんとうに車で行かないの？」

包丁を投げ出し、冷蔵庫の扉のあけ閉めの音をさせながら、宗子が言った。柔らかな、遠慮気味でさえある声だ。内心はとにかく、宗子は感情の切りかえが早い。母親が八年前に死んで、それなりに苦労しているせいだろう。

「結局は電車の方が早いよ。」

それは大した理由にならない、と思いながら言った。しかし、今日は土曜日で、横浜への道路は車が混むことも確かだ。

「私が運転するんですもの、つき合ってくれたっていいじゃないの。」

宗子はタッパー・ウエアの蓋をしながら、こっちの部屋へ出てきた。

すでに白いトックリ・セーターに、焦茶の裏革のヴェストとパンタロンという外出の支度を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

している。持っていく防寒ジャンパーや鞄類も、居間の椅子の上に出ている。
「俺が先に着いて、お父さんの手伝いをした方がいいよ。」
「そんなこと言って、ほんとは行きたくないんでしょう。」
宗子は柔らかな声音は変えないが、やや日焼けしてあさ黒い頬や、窪んで大きな眼もとを硬くして言った。
まったくその通りなんだ、とつい胸のなかで思った。やっと三月になったとは言え、たぶん船の上はまだ寒い。船を動かすにしろ、令吉は専門家かもしれないが、人手も充分でない。無理をするのは、後悔のもとだ。むしろ、宗子自身も行かずに、今日の段取りをとりやめにしたら、とさっきから婉曲に言っているのに、それが通じない。
「正直なところ、俺はどっちだっていいんだ。」
相手の言うことを肯定すると、話がもっとこじれるので、曖昧な言い方をした。
「しかし、俺が行かないと、人手が不足だ、と思ってね。お父さんもそろそろ齢(とし)だし。」
今日の予定が変えられないなら、自分も何としても行く、という気持はある。
「父はまだ六十そこそこで、そんなに齢でもないわ。若い時から、海軍できたえてるし。」
何と鈍感で、酷薄な女だろう、と一瞬むかっとした。しかし、娘として父親を弁護しているつもりかも知れない。

それに、こちらの家族の問題でも、むこうは抑えている感情もあるだろうから、とこれ以上言葉を控えた。

「さあ。じゃ、しようがないから、一人で先に出ます。」

宗子は椅子の上のジャンパーと、手提げの革鞄をとりあげ、

「このバッグ、車までお願い。」と、まだ大きなセール・バッグがあるのを眼でさして、廊下へ出た。

玄関から、つづいて門内へ出て、すぐわきの狭い土の上に駐車した中型車へ、バッグを運んだ。宗子が運転席に乗りこんで、車を前の道へ廻すと、それを後部座席に入れた。

「じゃ、先に着いていてね。」

宗子がちょっと頷き、車を始動させると、わずかの間それを見送った。宗子は学生時代から、免許証だけは持っていたが、去年、頻繁に父親のところへ行くようになってから、その中古車を買った。

ことによると、自分が宗子の車に乗りたがらないのも、父親への態度に抵抗を感じているのかも知れない。玄関へ戻りながら、ふとそう思った。父親と娘と二人だけの肉親のつながりも、わかっているつもりだし、令吉をけっして嫌いではないが、知らぬうちに嫉妬しているのかも知れない。

居間へ戻ると、もう身仕度もできていて、すぐ出なければならないのに、またソファに坐りこんだ。今ごろ、やっと気づいた自分の感情に、まだ不快にこだわっていた。

反面で、その父と娘にたいしても言い分があるが、つとめて公平に見て、いつも負い目を感じている。第一、自分は宗子と知り合った時から、別居中の妻と二人の子どもがいる。二年ほど前に、妻と学齢前後の娘と息子は、千葉の実家へ帰り、たまに生活費を届けながら、子に会いにいくだけだ。事実上、その結婚生活は終っているのだが、妻や後見人の兄といくつかの事柄がおり合わず、今も籍は抜けていない。

しかも、令吉の側から見れば妻に死なれて、長い間いっしょに暮した娘を、こんな男に取られてしまったことになる。宗子はそれだけの犠牲と心の負担を背負って、自分と暮していることになる。

宗子にすれば、さまざまな言い分や感情があるのは当然だし、よく抑えている方と言える。二十代の後半の未婚だったくせに、ひと廻りも上の男と、深くつき合ったのが、不幸とも思える。

しかし、そんなことを、いつまでも考えているわけにいかないから、ソファを立つと、居間のガラス戸や窓などの戸締りを確かめ、バーカーを着て、玄関を出た。

ここは都内の西寄りの郊外なので、私鉄駅へ七八分歩けば、横浜の神奈川区の高台へは急行

でまっすぐだ。

桜の開花の前触れのように、陽射しは暖いが、風はやや強い。昨夜、半ば徹夜で書きものをしたため、顔やあたまは、血の循環が鈍ったように冷たい。書きものと言っても、あちこち取材しては雑誌のリポート原稿にしたり、編集側で揃えた資料や指定する人間への面接などをもとに、現状の分析をするといった、ほとんど名もない仕事だ。

一昨年、ひさしぶりに宗子に会った時も、これに似た体調だった。雑誌の記者と一週間、東北を歩き廻って、夜行で上野駅に着いたが、車内ではよく眠れなかった。同行者と駅の中で別れ、タクシー乗り場へ急ごうとしたとたん、右足の痙攣が始まった。足を旅行で酷使しすぎたのか、足首から血の循環がとまったように冷たく硬直し、腿へ這い上ってくる。

どこか病院へ行かねば、と考えて、辛うじて手近な赤電話まで行き、手帖を出したが、その住所メモに、大学のヨット部の先輩たちの名前が眼についた。その一人の令吉の娘は、何度か懇親会などで会ったことがあるが、たしかお茶の水の病院の検査室にいる、と聞いたのを思い出した。

ようやくタクシー乗り場まで歩き、車でその大きな病院へ行くと、受付で宗子の化学検査室へ、電話を廻してもらった。

宗子は電話をうけて、驚いた声をあげ、慌しくエレベーターで降りてきた。そうして手で支

え、外科や物療室などへつれ廻ってくれた。
あの時期の相手の感触が、桜の開花前の風のように、生温く感じられる。しかし、今はお互の微妙な変化のために、どこか鋭いいたみを伴っている。

その高台の空地からは、遥かに横浜港の水面や船が、銀粒子を刷いたように霞んで見える。
令吉の家はこの空地のすぐとなりだ。鉄平石をはりつめた門を入りながら、思わず宗子の車が着いているか、と眼を配ったが、前庭はただ殺風景な土肌を、広々と晒している。
わずかな槇や樅のような樹は、宗子がいる時植えさせたそうだが、令吉自身は手入れもしないので、葉尖は黄ばんでいる。家も洋館で、かなりの坪数なのに、白い外壁は煤けて、ヴェランダの鉄柵も銹びている。
扉際のチャイムの釦をおすと、なかから返事もなく、しばらく間を置いてスリッパの近づく音がした。扉のロックがはずされ、令吉のわずかに微笑した顔がのぞく。
「先に一人で、電車できました。」と会釈しながら言うと、
「そう。まだ支度ができてなくてね。」
令吉は機敏に軀を返して、どんどん廊下を戻ってしまう。

中背だが、肩も腰も筋肉がつき、半白のたっぷりした髪が自然に額の上でわかれているのが、いつも眼をひく。顔の皮膚は長年、日焼けしてほとんど褐色で、鼻などの造作は不均衡だが、眼が宗子に似て大きい。

広い上りはなで、スリッパを履きながら、その壁に白っぽく額縁のあとだけが、目立つのに気づいた。そこにはいつも大きな海図が、木枠でガラスの額に入って架っているが、今日はとり外されている。令吉が戦争中、海軍将校として掃海艇に乗り組み、作戦に使ったフィリッピン北方の海図で、何か生臭いほど汚れて、船の航跡図が黒い線で何本も引かれていた。

「海図の額は外したんですか？」

廊下のおくの洋間へ入ると、何となく気持がひっかかって、令吉に訊いた。

「いや。海のない海図なんて、目ざわりになっちゃってね。」

令吉は薄暗い板敷きの上で、大きな布の袋へ、折りたたんだ白い帆(ヒル)をつめこみながら言った。その顔はほとんど無頓着で、何のわだかまりもない。

このだだっぴろい洋間は、いつも入るたびに落着きのわるい、妙な気分にさせられる。元は居間と食堂が一緒になった部屋のようだが、居間の長椅子やテーブル、置き戸棚が残りながら、あとは隅の方に工業用ミシンがあったり、縫製台があったり、ナイロンの帆布の巻尺が積んであったり、床にカッターや長い木製の定規、型紙や断ちきれなどが散乱している。頭上が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com